



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和五年一月 第三百二十二号

寒中お見舞い申し上げます。

ここ最近、十年来の大寒波とかで、身も、そして心まで縮こまっております。
年末年始

皆さま、年末年始をいかがお過ごしだったでしょうか。闘病生活で年を越された方もおられることと拝察いたします。

私は、いつものように除夜の鐘をつき、元旦の早朝七時には、お勤め、そのあと参詣者の方にお一人ずつ「おめでとうございます」の挨拶を連発し、表向きは例年のごとく過ごしました。そして午後は、つまらないテレビを見ながらお酒を飲んで寝ました。

お雑煮は今年も食べませんでした。おせちは、毎年作ってくれていた母が亡くなって以降、その習慣は無くなりました。つまり、普段と変わらない生活がダラダラと続いております。これが私のリアルなお正月。

鏡もち

本堂の仏さまにお飾りする鏡もちは、今年も市販の「さとうの鏡もち」でした。それを見るたび、いつも昔のことを思い出します。近所の方と一緒に臼と杵で餅をつき、つくたてのお餅がなんとも美味しかったこと。便利さだけを求めていると、人間関係も薄くなり、鏡餅もこんなふうになるのですね。

ラブレター

昨年暮れから介護施設で暮らし始めた女性からお手紙を頂きました。長年お参りに伺って親しくして頂いた方だったので、まるでラブレターのようにワクワクしながら開封しました。「毎日ウロウロし、すいません申し訳ないです、の言葉を繰り返しながら過ごしております。出されたものを食べるだけの日々で、時おり窓の外を見ながら、自由に歩けた日々のことを思い出し、情けない自分を思っております。だけど施設に行くことは自分で決めたことなので頑張って生きております。朝食後、ゆっくり「正信偈」のお経をお勤めすると心が落ち着きます」と震える文字で書かれていました。

一人暮らしでご自宅におられた時には、食事も全部自分で作り、マイペースで過ごしてこられた彼女にとっては、この環境に慣れていくのに時間がかかりそうです。

彼女ほどに長生きはできませんが、早晚、私もお世話になる世界です。

仏さまから戴いた命、辛さを乗り越えて頑張って生きてください。

元氣な大人たち

先日、ユーチューブを探っていたら、四十年前のテレビ討論会を見つけました。参加者は白のブレザーを着たキザな格好の石原慎太郎、暴れん坊のハマコウこと浜田幸一、サングラスがトレードマークのアル中ぎみの野坂昭如、「ベ平連」のリーダーで巨漢の小田実、そして司会は田原総一郎。みんな若いなあ。

彼らはそろって子供の頃、戦争を体験しています。その体験をもとに、一方は、国を強くしなければならぬという国家主義に向かい、一方は国家より一人一人の命が大切だという左翼に分かれていきました。つまり根っこは同じ経験をし、軍国少年だった人たちが、何故か正反対の思想に分かれていったということです。

討論会では、みんなそれぞれ好き勝手なことを言って、怒鳴りあっていました。

「非核三原則は間違っている。核兵器なしにどうやってこの日本国を守るのだ、答えをみる、バカヤロー」「この戦争を日本はちゃんと反省してないんだ。天皇制も無くすべきだ。あんたなんかと馬鹿な漫才してるひまはないんだよ」等々。スタジオにいた観客も拍手をしたりヤジを飛ばしたり、今のテレビでは考えられないぐらい大らかでした。冷静を保とうとする司会の田原総一郎も、彼らのやんちゃを抑えきれません。そしてその熱気が、とてもユーモラスでもあり、つられて私も若返った気になりました。

四十年前のあの頃、戦後生まれの私は、空襲と敗戦を経験し、戦死者を身近に見てきた彼らから生きる姿勢を学んだような気がします。本気で国の未来を考え、人間の命について考えていると思いました。少なくとも彼らの存在が当時の私を元気にしてくれたことは間違いありません。

戦争はもちろんあつてはならないことだと思います。だけど戦争を生き延びた人にとって、ものごとを考えるうえで、戦争は大きな意味をもっているとあらためて思い知らされました。そして、私を元気にしてくれた四人はみんな、この世を去っていきました。

映画『ミクロの決死圏』

五十年ほど前、「ミクロの決死圏」というSF映画を見たことがあります。たしか医者や科学者を円盤のような船に乗せて、それを注射針を通るほどの大きさに縮小して体内に送り込み、血管の中を通って脳までたどり着き、患部の脳神経を治療する、というストーリーでした。血管の中がスクリーン一杯に映し出され、まるで宇宙を旅しているようです。その中をやわらかいゴムボールのような赤血球や白血球、血小板などが浮遊し、その中を船はすり抜けていきます。

時おり白血球が敵と勘違いして船を攻撃してきたりします。耳のそばの血管を通る時には、大きな音の響きで嵐に巻き込まれた船のように揺れる。途中、船の中の空気が減ってきて、赤血球から酸素を取り込もうと努力する、そして、最後に危機一髪の体内からの脱出。そんな内容で、子供ながらに感動したことを今も覚えています。極小のまさにミクロの世界のすごさ。

令和五年の熟柿庵・行事予定

☆ 春・彼岸会法要

三月二十一日（火曜日祭日）午前十時

☆ 盆会法要

七月十五日（土曜日）午前十時

☆ 秋・彼岸会法要

九月二十三日（金曜日祭日）午前十時

☆ 築地本願寺・合同法要

十二月二日（土曜日）午前十二時

☆ 仏教にまなぶ会

三月から再開を予定しております。

日時はあらためてご連絡します。

年回表

一周忌	令和四年にご逝去の方
三回忌	令和三年
七回忌	平成二十九年
十三回忌	平成二十三年
十七回忌	平成十九年
二十三回忌	平成十三年
二十七回忌	平成九年
三十三回忌	平成三年

今年も仏教を片手に、心の中を旅してまいります。よろしくお願いいたします。



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和四年十一月 第三百三十一号

紅葉まつさかりです。公園わきのハナミズキの葉が青空に赤く輝いています。熟柿庵の柿もそれなりに実り、今は干し柿になってベランダに吊るされ、収穫されるのを待っています。毎年のことですが、晩秋を感じさせてくれる穏やかな光景です。

ネコとマナ識

突然ですが、通りすがりのネコに聞いてみました。

「ねこちゃん、君は、自分がいずれ老いていくことを知っているかい。そしていずれ死んでいくことを知っているかい？」

ネコは答えます。

「そんなこと、知るわけニャーよ」

この会話には、ネコはしゃべれないということも、大きな間違いがあります。それは、そもそも自分が生きていくと、そのことをネコは知らないのです。そのことを本人が知るためには、自分を知るための、もう一つの目が必要で、その目をネコは持っていないのです。

ネコが、えんがわで日向ぼっこをしながら、遠くをみつめて物思いにふけているように見えるのは、人間が勝手にそう思っているだけで、実はなにも考えていなくて、日差しを浴びて時を過ごしているだけです。

「二十億光年の孤独」の詩人、谷川俊太郎氏は「鳥」という詩のなかで、

「鳥は生を名づけけない 鳥はただ動いているだけだ

鳥は死を名づけけない 鳥は動けなくなるだけだ

と語っています。「ただ動いているだけ」とは

鳥もネコも、それぞれの環境のなかで、

与えられた命を精一杯生きている、ただそれだけ

ということなんです。いずれ死んでいくということも知らずに、
たった今だけを生きているのです。

そして死を知らないということは、たった今を生きている、ということすら知らないのです。鳥の死はただ「動かなくなるだけ」ということです。

死が悲しいのは、それを見ている私の心です。

さて、私たち人間はどうでしょうか。人間もほかの生き物と同じように命を生きています。その命は、ネコや鳥と同じように、自分で造ったものではありません。昔の人は「命はさずかりもの」という言い方をしました。まさに不思議な縁でさずかったものです。

だけど人間は、自分が年老いていくこと、そして最後は死ぬことを知っています。つまり自分を見つめるもう一つの目をもっているのです。仏教ではこの目のことを「マナ識」と云います。

このマナ識という心のはたらきによって、私たちは自分の存在だけでなく、過去とか未来という時間を、また空間ということまで作り出してしまいました。このマナ識の心がなければ、私も世界も宇宙も存在しない。

なんと不思議な心を、人間は持ってしまったのでしょうか。いったいどこから、どのようにして、このマナ識の心は生まれてきたのでしょうか。

マナ識

人間は、赤ん坊の頃、マナ識を持っていませんでした。つまり自分ということを知らずに、ただひたすら育ててもらってきました。だけど成長するにしたがつて、マナ識が活動し始め、命を自分の命と思いはじめます。私を生かしてくれている命なのに、さずかった命なのに、「いや、この命は私の命だ」と思い始めるのです。

このマナ識は、人間だけが作り出す独特の意識です。そしてついには、さずかった命とマナ識の境目が無くなり、区別がつかなくなり、それが「自我」とか「エゴ」という言葉になり、「私が頑張つて生きているのだから私の命なのだ」という思いになっていきます。そしてその命はいつか死ぬのだということをマナ識から教わります。その不安を抱えながら、老いていくつらさを抱えながら、悩みながら生きていきます。

これが私たちの人生です。つまり私たちは、さずかった命と、マナ識によってつくられた「私の命」という矛盾した二つの命を生きているということになります。そしてついには、マナ識に教えられた「私の命」という思いを中心にして生きていきます。

仏教では、このマナ識という心のはたらきによって悩みが作り出されるのだから、マナ識を消し去りなさいと教えます。「無我になりなさい」と。

だけど私たち人間は、「私が生きている」という思いを消し去れるほど単純ではありません。どんなにつらい思いをしたって、どんなに悩み多き人生であった

としても、どんなに腹の立つことがあっても、「私の命」という思いがあるからこそ、生きていくという実感を得ることができると。「私が生きている」という思いを消し去ることなど、できるわけがありません。

なぜマナ識の心は人間だけにあるのでしょうか

ほかの誰でもない私という人間が、肉体をもって、なぜこの世に生まれてきたのか。そして辛いながらも頑張って生きていることの理由は何なのか。その答のヒントが、実はこの「マナ識」をもっているということにあるのではないかと思っ

ています。私の所有物としての命と、さずかった命の両方を生きている私。その両方を生きていくからこそ命の不思議さが感じられる。

ヨーガ行唯識（ゆいしき）

日本では「ヨガ」などと云って、減量や体調を整えるための方法として流布していますが、実はヨガは正確に言うところ「ヨーガ行唯識」という古代インドの仏教に由来しています。インド人は心を静め集中して、心を観察していく中で、心のはたらきを八つに分け、その七番目の意識として「マナ識」を発見したと云われています。そして最後に、これら八つの心が、本当はすべて「まぼろし」であると結論づけました。すべては人間の心、すなわち意識のはたらきに過ぎない、と。ちなみに、近代を代表するフランスの哲学者ルネ・デカルトは「われ思う、ゆえにわれあり」という有名な言葉を残しました。

しかし唯識から云うと、この「われ」は、マナ識によって作られたまぼろしに過ぎない、ということになります。もしデカルトがこの唯識を学んでいたらどのように思うのでしょうか。

熟柿庵の掲示板

私が思っている「私」というのは

まぼろしである、と仏教は教えています

そして

そのまぼろしの「私」のおかげで

悩みや苦しみがあり

また希望や喜びも生まれてきます

生きているという実感もわいてきます

【お知らせ】

☆ 築地本願寺合同法要のご案内

十二月三日（土曜日）昼十二時より築地本願寺の「東日本間」において合同法要を行います。築地本願寺内の西福寺納骨区画に埋葬されている方にご縁ある皆さまのご参詣をお待ち申し上げます。

なお、集合場所は築地本願寺、本堂内の右側の受付前といたします。

今年の最後に

今年も早や一年が終わろうとしています。

今年もいろんな出来事がありました。世界的な規模で広がっている干ばつや洪水の異常気象、世界戦争になりかねないロシアのウクライナ侵攻、北朝鮮によるミサイル乱発、旧統一教会問題、日本円の価値下落や物価高など、今後どうなっていくのか心配なことばかりです。

そして、身近な出来事の一つ。今年、百歳になる女性との別れがありました。つらいことをいっばい経験されて、長年一人で過ごして来られました。

先日お伺いした時、「介護施設にお世話になることにしました。いつかこの日を決めなければいけないと思っていました」とご子息をそばにして、ふだんと変わらず凜として語ってくださいました。

毎月お参りに伺うたびに、ご自身の身の上話や、政治のこと、戦前の体験など、様々なお話を聞かせていただきました。

そして、二十年間続いた、この大切なひと時に終止符が打たれることになりました。最後は「正信偈」のお勤めが別れの言葉となりました。

I miss you so much .

みなさま、良い年をお迎えください。



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和四年九月 第三百十号

彼岸の世界

絵画教室にて

三十年ほど前でしようか、一時期、絵画教室に通っておりました。油絵で人物画を描いていた時、肌の質感が出せなくて困っていたら、先生に「肌は肌色ではありません」とアドバイスされました。いったいどういうことなのでしょう。肌は、頭では「なんとなく肌色」と思っ肌っぽい色を使っ描いていたのですが、よく見ると赤や青、黄など、実に様々な色が混ざり合っっているということがわかってきます。というわけで、今まで頭で勝手に思い込んでいた色を打ち消して、できるだけ頭を空っぽにして、対象をしっかりと観察するところから始まりました。現実に目の前に広がっている色と、そして頭に思い描いている色の大きな違いを感じました。

クロード・モネ

印象派のクロード・モネという画家の「水連」という絵は、遠くから見れば池に浮かんだ水連とわかるのですが、近くで見ると、たくさん色が重なり合っいて、なんの絵なのかわからなくなります。「日の出」という作品になると海や空の輪郭までが溶け込んで、つきりしなくなります。モネはきつと、太陽の加減で、刻々と変化していく色と輪郭を必死になっ追いかけて、ギリギリのところ、絵を描いていったように思えます。ほんとうだったら、もっともっと混沌（こんとん）とした風景になっしまっ、作品に仕上げることなどできなかつたのではないか、などと思っます。だけど彼は画家だから途中で追いかけるのをやめて、本来は固定などしてない風景を、固定化して作品にせざるを得なかつた。そうでなければずっつと描き続けるしかありません。

そもそも、私は普段どんなふうにも身のまわりのものを見ているのでしようか。もちろん私は画家ではないので、まわりのものを深く観察したりしていません。表面的な外見だけでもを判断して生きています。そうしないと忙しい日常生活など送れません。

本当の世界

古来、人生を深く見つめてきた哲学者や宗教家は、どのように世界や人間を見、考えてきたのでしようか。

大きく分けて二つの世界があると云っます。一つは、先ほどのように肌の色はこんな色だと思っ込み、そしてそれぞれのものにはちゃんと輪郭があると思っ込んでいる日常的な世界。これを表層の世界と云っます。もう一つは、その表層の奥にひそんでいる本当の世界、これを深層の世界と云っます。深層の世界はいつたいどうなっっているのでしようか。

古代中国の莊子(そうし)は、ものがバラバラに存在しているように見えるけれどそれは妄想であって、本当はそれぞれに輪郭もなく、ひとつながりのカオス(混沌)だと云います。それぞれに名前がついているから、その名前に惑わされて、そのものが個別にあるようについ見えてしまうのだ、と云います。仏教ではそのカオスを無とか空という言葉で表現します。この言葉は勘違いしやすいのですが、なんにもないということではなく、すべてがつながりあっていて区別できない、だから名前もつけられないということです。難しい。

今年一月に亡くなったティック・ナット・ハン氏は、私という存在について「私の命は、私の命以外のすべてによって成り立っている。私の命は、私の命以外のあらゆる命そのものである」と語っておられます。また、私の先生であった武田寛弘氏はある法座で「私はほんとうに多くの命によって育てられてまいりました」としみじみと語っておられました。先生の生い立ち、家族、多くの檀家さん、そして理不尽なきびしい環境、そうしたものすべてが自らの血となり肉となって今がある、とお聞きしました。

私は、生きていくためには自分中心の表層の世界を捨てられません、決して。だけど世界は表層だけで成り立っているのではなく、背後に深層の、本当の世界「彼岸」があるのだということの時おり思いながら生きてまいります。

【お知らせ】

彼岸会法要と開眼法要のご案内

九月二十三日(祭日の金曜日)午前十時から、彼岸会法要と開眼法要をあわせてお勤めいたします。相変わらずコロナ感染の広がりがしつこくて、なかなか安心できませんが、マスクをつけ、手指消毒、換気などに配慮して前向きに進めてまいります。みな様のご参詣をお待ち申し上げます。

阿弥陀如来の開眼法要について

新しいあみだ様を熟柿庵にお迎えして早や二年になります。当時すでにコロナ感染がまん延しておりまして開眼法要もできず、今になってしまいました。気持ち新たに、お迎えのお勤めを致します。制作は宮木菜月さんをお願いして、ほぼ一年半がかりで作っていただきました。

宮木菜月さん

もう十年近く前になるでしょうか、なんとも不思議なご縁で宮木さんにお会いすることができました。当初、想像もしていなかったのですが、その頃の肩書は「東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室」とのこと。私の知るいちばん長い肩書です。でもご本人は、その堅苦しそうなイメージとは裏腹に若くてたのしいかたです。今年頂いた年賀状には、彫刻刀を口にくわえたかわい虎の絵と、そのとなりに「今年も彫ります!」と書かれていました。その彼女が今回、熟柿庵の開眼法要にご参加いただくことになりました。その折りには、創作当時のお話などを伺えればと楽しみにしております。



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和四年七月 第二百一十九号

七十歳の哀愁

七十歳、なんとも中途半端な年齢です。昔だったら、いや今だって「おじいちゃん」なんだろうけれど、そんな枯れた気にもなれなくて右往左往しております。

残りの人生、もうそれほど長くはないだろうなという思いが頭の隅にあって、できることなら死ぬ前に、あれもやりたい、これもやらなきゃと、そんなあせりの思いだけが空回りしております。そして結局なにもしないで一日が終わってしまう。今日もむなし思いだけが残ってしまった。酒がないと眠りもできやしない。

本当はこんなあたふたした老後を送るはずではなかった。風呂敷をゆっくり折りたたんでいくように、今までのいろんなことを整理しながら、人生の余韻を楽しみながら、のんびりと老後を送ることを思い描いていた。

世間では、くよくよせず楽しいことだけして、好きなように暮らしていけば良いじゃないかと云う人もいる。だけど人間はそんなに単純ではない。楽しそうに見える人だって、そんなのは一瞬だけで、あとは長い孤独の時間を過ごすわけで、そんな無邪気な話をしていく人のことが逆に切なくなってくる。

思いばかりが先走って、じつくりと時間を積み重ねていくように過ごすことができない。そんなふうにして、だからだと続く日常生活。

二十代の頃だって四十代の頃だって、悩みは無くはなかった。それどころか若い頃のほうが悩み多き時代だったようにも思う。だけどどうも、その頃の悩みとは質が違う。今思えば、その頃は「まだ先がある」という漠然とした思いが、無意識のうちにあったのかもしれない。いやいや当時だってそんな余裕の思いなんかなくて、せっぱつまった悩みだったはずだ。心に余裕があったら「悩み」なんて言わないのだから。話がまとまらなくなってきました。結局、悩みの内容はその時々によって変わっていくのだけれど、悩みながら人生を終えていくのだけは間違いなさそうです。

そしてもし八十、九十まで生きているとしたら、もつと突き抜けた新たな世界が見えてくるのかもしれない。

昨年、八十歳で亡くなったジャーナリストの立花隆さんが晩年、取材記者に向かって「あんたはまだ若いでしょ、つまり人生が全然わかっていないということよ」とか「私は若い頃、偉そうなことをいっぱい言ったり本に書いたりしてきたけど、そんな仕事なんか、今となってはチャンチャラおかしいと思える」と語っていた。あるいは死につい

て「若い頃は死がとて怖く思えたけど、この年になると、その恐怖が薄くなってきた」とも語っている。つまり七十歳前後を境にして、異次元の舞台に立ったということらしい。見える景色がまるで違ってくる。長年、積み上げてきたレンガのような何物かが崩れてしまったという心境だったのだろうか。

先日テレビで、彼の書齋である「猫ビル」が映し出されていた。生前、二十万冊以上の膨大な書物が置かれていた書棚、それがことごとく空っぽになっていた。そのシーンを見て軽い衝撃があった。人が死ぬという現実の一面を見た思いがした。

「今度生まれたら」

残りの人生をどう生きていけば良いのかを考えていた時に、NHKテレビで「今度生まれたら」というドラマを見ました。

主人公は松坂慶子が演じる七十歳の主婦。若い頃にやりたいことがあったのだけれど、夫の仕事の関係で、あきらめておとなしく主婦をして過ごしてきた。七十歳になって、奮起してそのことにチャレンジしていく。人生の最後に生きがいのある日々を送りたい。そんなドラマでした。七回シリーズで、どんな結末になったのでしょうか。

十年前

ほぼ十年前、『歎異抄講義録』を編集した本のあとがきに、こんなことを書いています。

「残りの人生、衰えていく肉体を抱えながら、解決することのない問題を抱えながら、心に傷を持ちながら、人を愛する気持ちを持ちながら、一方で消えては浮かんてくる憎しみの気持ちを持ちながら過ごしてまいります。今後どのような日々が展開していくのか、素直に楽しみでもありません」と。

十年前と今、あまり変わってないです。変わったことと云えば、老化が進んだことと、将来に対する「素直に楽しみ」という思いが少し減ってきたことぐらいでしょうか。

仲間の死

先月の下旬、友人のお葬式があった。享年七十三歳。寺の住職で、仏教の「求道会」を通じて半世紀近く付き合いがあった。一緒にお酒も飲んだし喧嘩もした。同じ職業だったから共通する言葉もいっぱいあって、仏教の問題意識を共有する、文字通りの仲間だった。その仲間の中だけで生きていられた私という存在もあった。

今は寂しさだけが残る。親しい仲間が居なくなってしまった寂しさ、私を認知してくれていた存在が亡くなって、私の中の一つの世界が終わり、私自身が変質していくという寂しさ。

★盆会法要のご案内

七月十六日（土曜日）午前十時より盆会法要を行います。みな様のご参詣をお待ち申し上げます。



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和四年五月 第二百二十八号

五月

つつじが咲き乱れ、新緑の香りを含んださわやかな微風が頬をなでていきます。見上げると真つ白な雲、その向こうには清々しい青空、吸い込まれてしまいそうです。今朝の散歩は久しぶりに軽い足取りでした。あとは、煩わしいマスクをはずし空気をいっぱい吸えれば云うことなしです。

まわりの穏やかな風景が私の心を軽くし、その軽さがいつそう周りの風景を変えていきます。互いに影響しあいながら、知らず知らずのうちに、すべての変化していきます。ここ数年、特別なことが何もないゴールデンウィークの、何気ない、そして心休まる一日でした。

プーチンのウクライナ侵攻

テレビでは連日、ウクライナでの悲惨な光景が映し出されています。戦争が兵士同士の戦いだけではなく、武器を持たない市民や子供への虐殺であり、レイプであり、破壊そのものであることを、あらためて思い知らされます。ほんとに「ひでえことしやがる」。ミサイルで建物がいとも簡単に無惨に破壊される光景を見ると、「東京がミサイル攻撃を受けたらどうなるのだろうか」と悪夢のようなことを想像してしまいます。

そもそもロシアは、なぜ同じスラブ民族のウクライナを攻撃したのでしょうか、一千万人以上の親戚が行き来する兄弟国なのに。

歴史的には、もとはキーフ・ルーシという大国があつて、首都は現在のウクライナのキーフにありました。現在でもロシア正教の伝統ある素晴らしい教会があります。その後分裂と盛衰を繰り返しながらも複雑な歴史をへてきました。最終的にはロシア帝国が革命によって崩壊し、ソビエト連邦が成立します。連邦時代の、特にスターリン時代のロシアは同じ連邦国のウクライナから大量の穀物を収奪し、数百万のウクライナ人が飢えて亡くなりました。先日、その頃のウクライナを描いた「赤い闇」という映画をネットで観ました。いたる所の農村の道端で死体が横たわり、子供たちは兄弟の人肉を食べるというシーンまであつて、後味の悪い悲惨な映画でした。連邦と云いながらもロシアはウクライナを見下していたのでしよう。

今後、この戦争がどのような結末を迎えるかわかりませんが、プーチンはおそらくヒトラーと同じような最期を迎えるような気がします。結局、この戦争であらためてわかったことは、人類は弱肉強食から一歩も抜け出していないということです。

それにしても私は、あまりにも東ヨーロッパの歴史を知らないことに気がつきました。チエルノブイリの原発がウクライナにあることも知りませんでした。

僧侶失格

僧侶には大きく分けて三つの役割があります。一つは亡くなった人を、お経をあげて弔うことです。一般的に追善供養と云われるものです。二つ目はお釈迦様以来受けつがれてきた仏教哲学をひもとくことです。私とはなにか、人間とはなにか、社会とはなにか、世界とはなにか、真実とはなにか、そしてどのように生きていくべきか、ということを明らかにすることです。私はこのことに魅かれてずっと仏教について学んできました。

三つめは「救い」ということです。人は生きていくうえで様々な不安、悩み、苦しみを抱えています。大半が解決できないことばかりです。そうしたことから解放されて、乗り越えて、明るく人生をまっとうしていくこと、これが「救い」です。この三つめがいちばん肝心なことです。その肝心なことが私にはいまだによくわからない。

親鸞聖人は、関東から京都まで何日もかけて命がけで尋ねてきたお弟子さんに向かって『なむあみだぶつ』のお念仏を称えて、あみだ様にたすけられるのだと信じる以外にお話しすることはありません。仏教の哲学的なことを聞きたかったら、比叡山や高野山の学僧に聞いてくればよろしい。」（歎異抄）と返事しておられます。

私はあみだ様を信じて「なむあみだぶつ」と称えたことはありません。ただ伝統的な作法として教えられてきたので称えているだけです。形だけの僧侶で、本当の僧侶としては失格です。救われているという思いもありません。ただもがいて人生を送ってきました。

数年前から念仏のあとに「すべてを阿弥陀如来におまかせします」という言葉を加えることにしました。おまかせしていない人生を送ってきましたから、称えるたびに耳が痛いのです。ただ人間を越えたおおきな存在はきっとあるだろうな、あつてほしいな、という思いだけではずっと心の中にあります。

盆会法要

七月十六日（土曜日）午前十時より熟柿庵にて盆会法要を開催いたします。

ご自宅へのお参りをご希望の方はご連絡ください。

今月の言葉

プーチンは正しいと思って戦争をしています

私も正しいと思って人と言い争いをします

世界は正しいことだらけです

そして

正しいと知っていることが

人を傷つけ、人を殺します



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和三年十二月 第百二十七号

ゆく年

今年は、あつという間の一年でした。こんなに早く一年が過ぎたのは、きっと新型コロナウイルスのせいです。感染者の数ばかりを気にして過ごしてきたような気がします。そのためかテレビをよく見るようになりました。そして、あらためてテレビがつまらないことに気がつきました。相いも変わらなずグルメ番組とお笑いタレントのくだらないおしゃべりと、あとはコマーシャルばかりで、もううんざりしております。今では天気予報とニュースしか見なくなりました。テレビを持たない若者が増えているという話によく納得しております。

というわけで最近ではアマゾンプライムをテレビで見られるようにセットして、そちらを見ています。そのほうが結構おもしろい。映画は見たいほうだし、ユーチューブとかいう動画も見られます。お気に入りの落語や、昭和のころの漫才、天文学者による「宇宙の不思議」といった話や、いろんな大学の講義まで居ながらにして見ることができます。僧侶のお説教まであります。それに、いちいちチャンネルを合わせる煩わしさもなく、リモコンに話しかけるだけで、その関連の動画がずらっと表示されます。あまりに便利すぎて、つまり、見たいものがいつでも何度でも見ることができるといえるのは本当に良いことなのだろうか、ふっと思ってしまう。だけど当然、ユーチューブに時間を取られて過ごしていきそうです。

危機管理

ウイルスによるパンデミックも大きな災難ですが、富士山の噴火が迫っていることや、首都直下や南海トラフの大きな地震がそろそろ起こりそうな心配です。そして何よりも、地球の温暖化で、夏はますます暑くなり、台風や大雨で、洪水がいたる所で起きました。土砂が崩れて家が流され、多くの犠牲者が出ました。不安な時代がいつきに押し寄せてきているようです。

不安な思い

先日、政府の「危機管理委員会」に招かれていた学者がこんなことを語っていました。「考えてみれば、おかしな委員会だ。津波にしても地震にしても管理しきれないから「危機」というのだ。そうした自然現象を管理しようとしたら莫大な税金がかかる。それに自然を管理すること自体がどだい無理な話だ。昔の人は危機に対して「管理」するという発想はしなかった。かれらは「覚悟する」と言っていた」

科学技術が高度に発達した現在、いろんなことがコントロールできるようになってきました。そしてついには自然までも管理できるのではないかと錯覚に、私たちは陥っているようです。そういう意味でこの「覚悟」というのは新鮮な言葉として私の心に響いてきます。昔、中国の儒教の教えに「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がありました。やるべきことをやって、あとはどのような結果も受け入れる覚悟をするという意味です。「想定外」などという言い訳はしません。江戸時代の良寛様も、「災難にあらう時節には災難にあうがよろしくさうろう。死ぬる時節には死ぬるがよろしくさうろう」と語っておられます。究極の「覚悟」の表現だと思います。

往相回向と還相回向（その4）

大乘仏教に『涅槃經』^{ねはん}という經典があります。親鸞聖人の書物にも多く引用されています。この經典に「一切衆生悉有仏性」という言葉があります。すべての衆生（私たち）にはことごとく仏のはたらきがある、という意味です。私の心の底に仏様がはたらいている。だけど仏様は私たちの意識を越えていますから見ることはできません。ふだんの生活の中で気がつくこともありません。

仏様は、どのように私たちの命の中ではたらいてくれているのでしょうか。たとえばとなりにつらい思いを抱いて生きている人がいる。私は自己中心的な人間ですから、その人のことを無視して生きることができません。だけど気になってしまふ。なぜ気になってしまふのか、きっと心のどこかに、その人は私のたいせつな命の一部であるという思いがあるからではないでしょうか。その人が笑顔になってくれなければ、私に本当の幸せは来ない。たとえば私の周りに憎たらしい人がいる。あいつさえいなければと思う。なぜそんな思いになるのでしょうか。きっとほんとうはすべての人と仲良くして生きていきたい、という思いがあるからではないでしょうか。

そうした思いこそが実は仏様のはたらきなのかもしれません。そんなややこしい思いがなければ、きつともっと自分勝手に自由に生きられるのに。

私の心は、煩惱と云われる自分勝手な思いと仏様のはたらきがせめぎあっています。そのせめぎあいの姿を、親鸞聖人は往相回向と還相回向という二つの面から分析しているのだと思います。

現代は、自己中心的な生き方が正当化され、仏性が心のすみちみに追いやられている時代に見えます。そうした状況が、たとえば精神的な病いとして顕在化しているのかもしれない。うつ病になるとか、ひきこもりとか、人とうまく接していけないとかノイローゼになるとか。こうした現象は周りの自己中心的な人間に囲まれて、私の心にある仏性が、活躍できなくて、反発して現れているのではないか、などと妄想しております。年の瀬に、ちよつと話が飛躍してしまいました。

令和四年の熟柿庵・行事予定

☆ 春・彼岸会法要

三月二十一日（土曜日）午前十時

☆ 盆会法要

七月十六日（土曜日）午前十時

☆ 秋・彼岸会法要

九月二十三日（金曜日祭日）午前十時

☆ 築地本願寺・合同法要

十二月三日（土曜日）午前十二時

☆ 「歎異抄にまなぶ会」

コロナ感染の状況をみて再開いたします。その折りにはご連絡いたします。

☆ 写経の会

「まなぶ会」と同じく、再開の折りにはご連絡いたします。

☆ 阿弥陀如来像・開眼法要

できれば年内に開催したいと考えております。